



TITLE:

経済学部 of 古典文献に思う

AUTHOR(S):

田中, 秀夫

CITATION:

田中, 秀夫. 経済学部 of 古典文献に思う. 静脩 2000, 37(1): 1-3

ISSUE DATE:

2000-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37572>

RIGHT:



経済学部 of 古典文献に思う

経済学研究科教授 田中秀夫

昨年の秋に経済学部は創立80周年を迎え、記念式典を行うとともに、附属図書館で古典文献資料の記念展示も行った。展示は二部に分かれ、第一部で「経済学の系譜」、第二部で「和古書の挿し絵にみる生活風景」をサブ・テーマに掲げて、それぞれに興味を引きそうな文献等を展示した。幸い予想を遥かに越える多くの方が展示をご覧になり、関係者の労は報われ、企画は有意義だったように思っている。

40数万冊を超える経済学部図書室の蔵書のなかには、ビュッヒャー文庫、マイヤー文庫、上野文庫、河上肇文庫といったきわめて貴重な特殊文庫があることはよく知られている。そしてその中には、経済学とその他の重要な古典的文献が多数含まれていることも今ではよく知られている。

そうした古典文献から「経済学の系譜」を再構成すべく今回は90点ほどの書物を選んで展示したのだが、そのプロセスで改めて気づいたのは、大量の資料があるにもかかわらず、経済学に限っても重要な古典的文献の重要な版本が必ずしも系統的に収集できていないという事実である。経営学は経済学に比べても歴史が浅いが、それでも重要な古典的文献というものは存在するので、当初は経営学の古典も展示したいと思



っていた。ところが、予想以上に本がない。80年も経っているのに、経済学と経営学の古典的文献が揃っていないというのは、意外ではないだろうか。しかし、考えてみれば、それもそのはずだということに思い当たる。

というのは、図書室所蔵の古典文献の多くは寄贈されたものであって、図書室が系統的に買い集めたものが中心をなすのではないからである。

そもそも経済学部・経済学研究科が潤沢な図書費をもてるようになったのは、ごく最近のことにすぎない。そう言えば、二十数年前に、わたしの指導教官であった平井俊彦先生（原稿を書いている2月現在名古屋外国語大学副学長）が本が買えないと嘆いておられたのを思い出す。あの頃は紛争の後で、研究環境はボトムだったかもしれない。先生はようやく認められた多くも無い科学研究費で、わたしが読みたいと思っていた本を買って下さった。「田中君、欲しい本があったら遠慮せずに言いや。」

当時と比べると今は図書購入費は格段に多くなったに違いないが、それでも部局がまず優先

して購入するのは当面必要な研究書やジャーナルであって、古典文献の収集はどうしても後手になってしまう。しかも、研究書もジャーナルも幾何級数的に増加しているから、実は事態は深刻である。まして特別の予算枠でも無い限り、古典文献の購入などは遠くに追いやられることになる。

こうして例えば、マーシャルの『経済学原理』は初版はあるものの、重要な版とされている2版も5版もないということになる。もっとも、近年はリプリントや著作集が大量に出るようになっており、経済の図書室でも、予算の許す範囲でできるだけ揃えようとしている。しかし、これらで間に合わせば十分かというところではない。研究に校訂版の全集は不可欠だが、校訂版は編者の研究成果が(バイアスとともに)盛られることになるから、オリジナルとは違ったテキストとなる。したがって、つねにオリジナル、各版に遡れることが研究には必要である。

今では経済学を中心とするゴールドスミス・クレス文庫(学者としては地味な仕事しかしなかったロンドン大学のフォックスウェルが生涯をかけて収集した最高に価値のあるコレクションであることはよく知られている)のマイクロフィルムがある(附属図書館所蔵)ので、原典研究はずいぶんしやすくなった。しかし、フィルムがあれば原本は要らないというわけでもない。オリジナルは容易に通覧ができる。他の機能をフィルムや電子情報に奪われるとしても、書物の通覧性は最大の強みとして残るであろう。古典的文献の初版や第二版など各版にはその姿において歴史性が刻まれており、それも重要な情報である。また優れた書物には物としての、さらに言えば文化財としての確かな手応えもある。世界の耐久性を構築する「仕事」(アレント)の産物としての書物にわたしたちはもっと自覚的であったほうがよいのかもしれない。文化財としての書物を強調するのは骨董趣味に接近するかにみえるのかもしれないし、場合によっては邪道かもしれないが、しかし、電子

情報の軽快さ、簡便さは必ずしもそれをオールマイティにするわけではないことは強調されてよいだろう。書物はオリジナルで読むにこしたことはない。もっとも、例えば、今では数百万円とも評価される『リヴァイアサン』を初版で読みたいとは思わない。しかし、クォート版の立派な初版は、たまに参照したいときはあるし、したがって必要に応じて参照できることは、研究には重要なことである。

ところで、社会学や人類学がドイツやフランスで発展したとすれば、経済学はとりわけ英米で発展した。したがって経済学部の蔵書は英米の書物が多数を占めている。しかし、多数ある英米の書物についても古典的文献はこういう事情だから、フランスとドイツの経済学の古典的文献はいっそう弱いように思われる。

それだけではなく、戦後から70年代までに出た洋書の収集状態は、一部のジャンルを除くときわめて惨澹たるもののように思われる。どうしてこの欠落を埋めればよいのか、頭が痛い。

限りある図書費だから、何もかもに強い図書室を作ることは不可能である。しかし、継続的に上の欠落を埋める努力をしないかぎり、やがて来る学部100周年に、さらに大きな宿題を残すことになりかねない。せめて20年後には代表的な古典については網羅的に収集しておきたいというのが、関係者の願いである。そこで、経済学部では古典文献収集費を予算化してもらうことにした(ただし、それがいつまで認められるかは定かではない)。教官と図書室職員が協力し合って、できるだけ効率よく古典文献を収集しようと考えている。その手段としてインターネットが大いに役に立ちそうである。

戦後の洋書も多くはインターネットで簡単に見つけることができる。問題はそれをいかに効率的に購入できるかである。個人が行っているように、図書室あるいは部局と海外の古書店とが直接に取り引きができないものだろうか。これにはリスクも伴うし、出入りの業者の仕事を奪うというマイナスはあるのだが、限られた

資金をできるだけ有効に使いたいという思いも断ちがたいものがある。よい方法を是非考えて欲しいものである。

わたし個人は18世紀のイギリスの、とりわけスコットランドの思想史を研究しているので、古典文献として強いのはその時代のものであるが、18世紀の古典文献は今では多くがマイクロフィルムになっているので、手間さえかければ、多くは国内で読めるようになった。また自らも当面の研究に必要なものは25年ほどかけて、買い集めたので、基本的にはそれを読めばいいし、図書館に依存する比重は小さくなっている。そうなったのは図書館を方々訪ね歩いてコピーをすることも、なかなかの労であって、労で疲れた一方、案外本を集めようとすれば集まるということを知ったからに過ぎない。まだ古書は市場に存在するし、往年に比しての近年の円高が強い味方になってくれている。昔は古書はいわずもがな、洋書は高価であった。

古典的なものはフィルムしか許されないことが多かったし、コピーもフィルムも研究には使えても、たまってくると使い勝手が悪い。しかも、関心が他に移ったら、まったくのゴミでしかない。ただし、18世紀研究で辛いのは、相手が古書だから単価が高いことである。35ポンドの新刊は高いが、100ポンドの古書は安いと思うのは、18世紀研究者の悲しい習性かもしれない。

偉大な思想家や学者には蔵書家も多い。とはいえ、凡庸な学者と比べてどうかはわからない。18世紀の哲学者スミスやチュルゴの蔵書は有名である。文学者スコット（スコットランドのボーダーに近いアボッツフォードのスコットの寓居の蔵書は目を見晴らせるものである）も、また19世紀末の大学者アクトンも図書館には依存しなかったというが、ヒュームやマルクスのように図書館で仕事した人も多い。現代では、研究者は基本的に自分の蔵書だけでは研究できない。まして自前のライブラリを持たない若い研究者にとっては図書館の蔵書が研究を大きく左

右する（その程度はフィールドやテーマによって違うとは言えようが）。

そして、そもそも文献収集というものは限りが無いし、研究は継承されなければならないから、どうしても大学の図書室の蔵書を充実させることが必要である。古書は図書館に入れたら終わりだ（鹿島茂）という見解もあり、それにも一理ありそうだが、しかし、貴重な書物は一人が独占するより、多数が利用するほうがよいだろう。

先にも述べたように、古典文献には歴史を経てきた文化財としての魅力がある。わたしは文部省在外研究員として英国に滞在した時に、中古車で疾駆して、各地のブックフェアを梯子して回ったことがある。有名なヘイ・オン・ワイには行かなかった（エディンバラ大学のディキンソン教授が行くほどのことはないと言いつめたのだが、未練はある）が、エディンバラ、ヨーク、オクスフォード、ロンドンのフェアでは沢山の古書に出会った。また旅先では必ず古書店を覗くことにした。こうして、貴重な古書を多数手に入れることができたが、17、18世紀の古書となると、モロッコ皮装の美本の場合、相当高価である。しかし、ちょっと無理すれば買えないものではない。そうしたとき、「これは英国の文化財である。それをわたしは買って帰ろうとしているのだが、英国に置いておく方がよいのではないか」と何度も躊躇うことがあった。お金を払って買うのだから、何もやましいことはないのだが、魅力ある書物というものはそういう感慨をもたらすもののようである。新しく出来る新棟の図書室には貴重書室が設けられる予定である。ハーバード大学のクレス文庫のような読書室は無理でも、そこでじっくり古典文献を熟読できるようなレイアウトのものに仕上がって欲しいものだ。バインド部分が壊れないように、120度しか本を開けられない書見台も設けて欲しい。

（たなか ひでお）